

PROFILE



青島 広志

1955年東京生まれ。東京藝術大学および大学院修士課程を首席で修了し、修了作品のオペラ「黄金の国」(原作:遠藤周作)が同大図書館に購入され、過去2回の東京都芸術フェスティバル主催公演となる。

作曲家としては「火の鳥」(原作:手塚治虫)、「黒蜥蜴」(原作:三島由紀夫)、管弦楽曲「その後のピーターと狼」、合唱曲「マザーグースの歌」、ミュージカル「11 びきのネコ」など、その作品は200曲に及ぶ。ピアニスト・指揮者としての活動も35年を超え、最近ではコンサートやイベントのプロデュースも数多くこなしている。

NHK「ゆかいなコンサート」の初代監督を8年務め、現在もNHKラジオ「みんなのコーラス」「高校音楽講座」にレギュラー出演のほか、テレビ朝日「題名のない音楽会」アドバイザー、日本テレビ「世界一受けたい授業」、テレビ東京「たけしの誰でもピカソ」、TBSラジオ「こども電話相談室」にも出演。著書に「モーツァルトに会いたくて」「青島広志でございます!」「あなたも弾ける!ピアノ曲ガイド」(学習研究社)、「やさしくわかる楽典」(日本実業出版社)、「作曲ノススメ」(音楽之友社)、「21世紀こどもクラシック」(全5巻・小学館)、「音楽家ってフシギ」(東京書籍)、「オペラ作曲家によるヘンなオペラ超入門」「作曲家の発想術」(ともに講談社)などがある。

東京藝術大学、都留文科大学講師。日本現代音楽協会、作曲家協議会、東京室内歌劇場会員。



長井高校のスタインウェイ

1923(大正12)年7月11日、ドイツのハンブルクから何台かのピアノが日本に向けて出荷されました。その中の一台、製造番号217170のB-211型が、現在長井高校にある世界的ピアノメーカー「スタインウェイ」のピアノです。

1926(大正15)年5月5日の山形新聞には次のような記事が掲載されています。「県立長井高等女学校には、今回町当局並びに有志の斡旋により、ドイツ製スタインウェイ、グランドB型の優秀なるピアノを購入したので披露のため、日曜会、長井中学校、長井小学校の後援の下に来る九日午後一時より同校講堂に於いて大音楽会を開催するに決し…」と。

ピアノがいつ高等女学校に搬入されたのか、誰が購入したのかは記録がなく明確ではありません。しかし、全国にも数えるほどしかなく、しかも大きな家が数軒は建てられるという金額の高価なピアノが、長井・荒砥間に軽便鉄道が開通して間もないような片田舎の女学校にあったのです。

「日曜会」とは当時、青少年有志が集い、文化や芸術、教育等を勉強した会の名前です。そのような有志が、教育や文化の重要性を認識したうえで、この長井の地でその花を咲かせようという熱い想いに突き動かされて一台のピアノのために東奔西走したのではないのでしょうか。

以来、このピアノは長井第二高校、長井高校、長井北高校、そして1964(昭和39)年からは長井高校に受け継がれて、音楽教育や部活動に大きく貢献してきました。

歳月が流れ、2002(平成14)年、修復不能と判断されたそのピアノはスタインウェイ・ジャパン社に引き取られました。学校とは一度縁が切れたそのピアノは



木曾 真奈美

岐阜県出身。東京芸術大学卒業。同大学院修了。14歳で名古屋フィルハーモニー交響楽団と共演し、テレビ出演。16歳でアメリカ演奏旅行。

モスクワ音楽院で行われた国際サマースクールにおいて最優秀の成績で修了。

第13回新人音楽コンクール(朝日新聞、飯塚文化連盟主催)にて第1位を獲得したのをはじめ、数々のコンクールにも入賞。日本演奏連盟賞、中日賞など受賞歴も多数。

NHK-FM「FMリサイタル」出演。またベルリン弦楽四重奏団はじめ、国内外のトップアーティストとも多数共演しており、高い評価を受けている。近年ではサントリーホールにてボリショイ劇場監督A.ヴェデルニコフ指揮ロシアフィルハーモニー交響楽団と共演。

「ステージでの、美しく堂々とした彼女とロシアフィル団員たちとのやりとりを見ていると、彼女は日本のロシア親善大使としても大きな役割を果たしているようであった」と絶賛を博した。

また同ホールにて小林研一郎指揮、日本フィルハーモニー交響楽団、沼尻竜典指揮同フィルとも、ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」を共演し高い評価を得た。

「展覧会の絵」を演奏するにあたっては、ムソルグスキーの生誕地を個人としては日本人で初めて訪れ、またラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」を演奏するに先立ってはラフマニノフと深い関わりのある村に建っている博物館など、ゆかりの地を単身訪ね、曲に対するイメージを膨らませて準備するなど、時代を超えて作曲家の心の奥底にまで触れようとする演奏家としての真摯な姿勢は、聴く者への共感をさらに高めることにつながっている。

当市においても2007年の第二回本コンサートでは「展覧会の絵」を、翌年には小林研一郎指揮の日本フィルハーモニーとの共演ではラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」を演奏し、その情感あふれる演奏に対する大きな感動の声が市民から寄せられた。

2007年ロシア国立チャイコフスキー博物館にて日本人としては初めて、大作曲家チャイコフスキー自身が愛用していたピアノを演奏する栄誉になった。これまでに藤井博子、播木枝未子、クラウス=シルデの各氏に師事。

彼女の心あたたまる歌いかけは、テクニックの素晴らしさとステージの華やかさが相まって、聴くものに夢と希望さえ与えてくれる。

Steinway Piano Concert



ドイツに送られて、職人の手によって再度新品同様に生まれ変わりました。スタインウェイ・ジャパン社が本校の音楽教諭にその事を知らせて下さったのは翌年の夏のことでした。大正期に製造された貴重なピアノが名も知れぬ片田舎の高校に保有されていたのには、何かしら特別な由来があるに違いないという推察があったからだといわれました。そこにもまた、メーカーとしてのピアノへの愛情が感じられます。

事実、調べていくにつれて、来歴だけでなく、ピアノに関わる数々の青春のドラマが浮かび上がってきました。そうして、同窓会がピアノの帰還に向けて動き出したのですが、今度はピアノと共に青春を過ごされたOBやOGをはじめとする、たくさんの方々の支援の機運が湧き起こり、ピアノが戻ってくることになったのです。

同窓会はピアノの維持と活用を目的としてピアノ委員会を設置し、3年に一度、プロの演奏家を招いて在校生に素晴らしい演奏を体験して貰おうと活動を始めました。そして、今回が4回目のコンサートになります。

歴史のある名器であるとは言え、ピアノはピアノ、物言わぬ楽器でしかありません。しかし、製造されてから90年、このピアノは人の熱い想いを受け、愛されてきたピアノです。いろいろな時代があって、常に青年達に寄り添ってきたピアノです。ピアノを介した語りつくせぬ物語がそこにはあったのです。

名器による素晴らしい音色、素晴らしい演奏を楽しんでいただくとともに、ピアノと、ピアノに関わった人々の物語や情熱に想いを馳せていただければ幸いです。(廣桜同窓会ピアノコンサート実行委員会)